

いことも多い。

現代世界は宗教的、非宗教的なものの質的な差異がなくなる世界になってきた。宗教およびその集団も、テイラーのいう *immanent* な枠組みに合致する感覚が元になっていく必要がある。宗教は世俗化された世界における *enclave* の一つとなっていくのだろうか。

パールシー社会におけるナオジョテの意義

香月法子

現代インドのゾロアスター教徒、パールシーにおける入信式ナオジョテは、儀礼前の浄め、聖職者による入信者への聖なるシャツのストドラと聖帯クステイの授与、そして続く信仰告白、祝福の祈禱、及び儀礼後の会食によって構成されている。この一連の儀礼によってゾロアスター教のエッセンスが学べるようになってきている。特に聖職者と入信者が共にクステイを結ぶ所作は、クステイの構造とクステイの祈りそれぞれの意味と結びつき、無駄がなく完成されている。またナオジョテには家族、親戚に限らず友人、知人も参加し、パールシー・コミュニティで共に祝うため、参加者は一般的に百人以上、中には五百人以上という場合もある。このように現代のナオジョテは、ゾロアスター教徒となると同時に、彼らのコミュニティの成員として受け入れられるための儀礼でもあるといえる。

ナオジョテはどのように成立したのか。まず聖紐とはゾロア

スター以前のアーリア人にとって、アーリア人の、また彼らが形成するコミュニティの成人男子の証として授けられるものであったこと、そしてゾロアスターが、これを男女共通のゾロアスター教徒の証として採用したのだろうということである。また教徒となるにあたって重要な信仰告白は、ササン朝以前には見られず、確立されたのもササン朝後期以後とされている。さらにパールシーの間でナオジョテという言葉が、平信徒の入信式を指すようになったのは十五世紀頃とされている。ササン朝滅亡後、ゾロアスター教徒に関する歴史的証言は少なく、ナオジョテの成立過程にも分からない点が多い。しかし上述のような研究成果を鑑みれば、ゾロアスター教の必須儀礼ともいえるナオジョテは、ゾロアスター教最盛期ではなく、ササン朝衰退期からその後の混乱期にかけて発展し、現在のような形に確立されたと考えられる。つまり単に入信式というだけでなく、ゾロアスター教への信仰心が揺らぐ不安定な時代の中で、ゾロアスター教を絶やさず存続させるという使命感が、ナオジョテを発展させたと考えられる。

現代パールシーにとって、パールシーに生まれたからには、ナオジョテを受けないなどということは考えられないことである。そして現在、このナオジョテを巡って世界中のパールシーは激しい論争をしている。それはゾロアスター教徒を巡る定義に関わっている。これまでのところパールシーは、この定義について統一見解を出したりすることができずにいる。それ故、彼らは、パールシー・コミュニティ内だけにナオジョテを受けられる資格を与えようとするグループと、コミュニティ外にもそれ

を広げようとするグループに分かれ、それぞれがそれぞれの主張に従って、ナオジヨテを行っているといった状況にある。そして彼らはいずれも、それぞれの主張の根拠を、彼らの歴史や聖典『アヴェスター』に求めている。しかし彼らの論争は平行線のままである。

このような状況の原因と考えられるのは、彼らパールシーの歴史観の欠如である。パールシーがパールシーの歴史を語る時、ササン朝滅亡後から十六世紀に西洋列強がインドにやってくるまでの出来事がほとんど出てこない。またあまたのナオジヨテ指南書にも、歴史的な考察は見られない。しかしナオジヨテとは、ゾロアスター教の教義に基づいて直ちに成立したものではなく、長い歴史の中で、各々の時代的情況を通して、その結果、完成されてきた伝統文化である。そしてナオジヨテを通して、そのような歴史的な流れに繋がりを感ずることができるとは、パールシーの子孫のみである。つまりナオジヨテとはゾロアスター教への入信を誓うだけでなく、パールシーの先祖とのつながり、あるいは自分のルーツを振り返るといった意義があるのである。

第二部会

国立大学神学部廃止とイタリア宗教史学

江川 純 一

ファシスト政権によってイタリア初の宗教史学講座が創設されたのは一九二三年である。そのちょうど半世紀前の一八七三年、イタリア王国議会は国立大学の神学部廃止を決定した。本発表では、五〇年の間に、いかなる環境のなかで何が用意されたかについて概観したい。

イタリア王国には一七の王立大学が存在したが、そのうちの一一大学がいわゆる総合大学で、神学部を備えていた。歴代の公教育大臣の名を取って「シャローヤッコッレンティ法」と呼ばれる法律の内容とは、国立大学の神学部を廃止し、神学部で行われてきた教育を文学部に移し新カリキュラムにするというものであった。ナーポリ大学やローマ大学などで実施されるが、神学部の教員がそのまま文学部に移されたにすぎず、結果として、神学の研究は弱められ、また、新しいディシプリンが即座に生まれることもなかった。国立大学の神学部廃止は王国政府と教皇庁との反目のなかで決定されたものであり、背景にはイタリアを覆っていたカトリックへの無関心が存在した。

一九一〇年代になり、研究者達は、各自の関心に従って個別の対象を研究している場合でさえ、「宗教」という概念を意識